

	方剂名	効能	生薬組成
	書籍	主治および証	病機 方意
<p>治風剂 平熄内風剂 3</p>	<p>ちんかんそくふうとう 鎮肝熄風湯</p> <p>医学衷中参西録</p>	<p>鎮肝熄風・滋陰潜陽</p> <p><主治> 肝陽上亢、肝風内動 頭のふらつき、めまい、眼球が脹る、耳鳴、頭が熱く痛む、胸中があつ苦しい、顔面紅潮、ときに嘔気などがあり、次第に肢体がしびれたり動かしにくくなり、顔面神経まひが生じたり、甚だしければめまいと共に昏倒し、覚醒の後に肢体が動かしにくかったり半身不随がみられ、脈は弦長で有力を呈す。</p> <p><病機> 肝腎陰虚で肝陽が上亢し、肝風を内動して気血が逆乱并走して上擾したために生じる類中風であり、内風の中経絡に相当する。 肝陽上亢、肝陽化風により風陽が上擾するので、頭のふらつき、めまい、眼球が脹る（目脹）、耳鳴、酔ったような赤い顔、頭が熱く痛い、胸中があつ苦しいなどがみられる。肝気犯胃で胃気が上逆すると、嘔気が生じる。肝陽過亢で気と共に血が逆乱上走し、清竅を蒙閉したり経絡を阻塞すると、意識障害、昏倒、肢体の麻痺や運動障害、顔面神経麻痺、甚だしければ半身不随などを引き起こす。脈が弦長で有力は、肝陽亢盛を示す。 本証は、基本に肝腎陰虚が存在するが、風陽の症候が顕著であり、陰虚は隠蔽されている。また、中経絡による知覚麻痺や運動障害が主体で、意識障害はあっても短時間であり、中臟腑のように閉証、脱証を呈する意識障害主体のものとは異なる。</p> <p><方意> 鎮肝熄風、潜陽を主とし滋陰を配合する。 主薬は大量の牛膝で、引血下行して陽亢を鎮めると共に滋養肝腎に働く。重鎮の代赭石・竜骨・牡蠣は降逆潜陽、平肝熄風し、代赭石は胃気上逆を鎮める。川楝子・茵陳・麦芽は、肝陽有余を清泄し肝気鬱滞を舒暢して、肝陽の平降潜鎮を助ける。龜板・玄参・天門冬・白芍は、滋陰養液、柔肝により陽亢を制する。甘草は諸薬を調和し、麦芽と共に和胃調中して、金石薬が胃を傷害するのを防止する。全体で鎮肝熄風・滋陰潜陽の効能が得られる。</p> <p><参考> 加減法 心中の熱（口渴、熱感）が甚だしければ、生石膏・知母を加える。 多痰であれば、川貝母・胆南星を加える。 舌の乾燥、尺脈重按し虚など陰虚が強ければ、熟地黄・山茱萸などを加える。 頭痛、めまい感が強ければ、夏枯草・釣藤鈎・菊花などを配合する。 大便実せざれば、龜板・代赭石を去り、赤石脂を加える。</p>	<p>牛膝・生代赭石各 30g・生竜骨・生牡蠣・生龜板・生白芍・玄参・天門冬各 15g・川楝子・生麦芽・茵陳各 6g・甘草 4.5g 水煎し服用する。</p>